

道院

紅十字會の概要

非売品

道院及び紅卍字會の概要

序 言

道院及び紅卍字會が創立されてから、すでに數十年になるが、すべてのそれぞれの宗旨や眞理はそれぞれ典籍に載つてゐる。しかしながら典籍の範圍が余りに龐大なためと文字の多くが古意を持つが故に、道を求める多くの士はどこから着手したらいいのか分からない。甚しきに至つては錯覺や誤解をまねいて、その確信すべき眞實性を失ひ、これでは大道を以て世を渡り本來の趣旨に違ふことになる。本院はこれに鑑み、茲に於きまして「道慈綱要」の重點に基き、これを摘録してほとよくとき明かし、更に母院の「道慈或問」やシンガポール道院の「道院説明」及び本院の「緣起淵源概略」等の書物を參考にして、これ等を綜合し、これを編纂した。而して「緣起淵源」や「道慈宗旨」、神位の安置、禮儀に關する規則などの注意すべき事項は新求信者にも分り安く簡約して説明し、まだ未求信者のためには其の概要を知ることが出来る、修業の助けとなるばかりでなく、又宣化の上にも大い裨益とするところがある、これを以て序（はしがき）とした次第である。

台北主院

例言

- 一、本書の名稱を「院會概要」と命名したのは、院とは道院、會とは紅卍字會を指して言ふのである。
- 二、道院に關する事項は「甲」に於て道務を説明し、紅卍字會に關する事務は「乙」に於て慈務内のことを説明する。
- 三、道慈はもとより一體兩面のものであり、修行にはこれを兼用し、強いてこれを分けることが出来ない。しかし實習上に於いては分別をしないでならない。その中の主なる内容のつながりは文中に於て納得してもらいたい。
- 四、この本の目的はすべて諸經訓の典籍に基きこれを簡單的確にその根源を説明したものであつてそれがいづれの文句や文章が何の典籍に基づいたものであるかと言ふことはいちいち説明しなかつた。
- 五、本院では更に一步進んで深く詳しく研究しようと欲する人の爲に多種の書刊を印刷しておいてから參閲してもらいたい。尙「道慈書刊目錄」が贈閱のためにおいてあるのでその利用と參考を歓迎する。
- 六、本書は初版であるので、或は間違ひや誤謬(あやまり)があるかも知れない、未詳の個所は教えて頂き、版を再び組む時にこれを改正すべきは言を俟たない。

甲、道務一即ち道院の事務である。

一、道院とは何か：

道院というのは、塵世の衆生がその善なる先天の本性を迷失したる爲に戦亂災却を造り、これを憐んで至聖先天老祖が且つて一度も公開されなかつた秘訣を以て法となし、五教の奥旨を綜合し、以て用となし、世人が悉く、その仁善祥和の本性を修得せしめ、世界をして平和に相處せしめ、以て大同盛世（差別を付けぬ極めて公平な世の中、乃ち天地と一體になる）の境に達することを冀うために道院を創立し、以て世を濟い、衆生を渡うのである。

二、道院はどうして發祥（吉兆の發端）したのか。

民國の初年頃、山東省の浜縣に多くの老修が居て、扶亂の壇に於て神様の啓示によつて創立した。

三、道院は何年に創立されたのか。

民國十年（西紀一九二一年）山東省濟南に於いて創立された。内政部に登録した際に「既に各省政府にも公文を送つて、當轄の民政廳に令を下して、各所屬機關に道院の保護にあたる旨」、指令された。

四、道院が祀つてゐるのはどんな神様か。

至聖先天老祖を初め、道教、儒教、回教、キリスト教の五教主及び統院、坐院、壇院、經院、慈院、宣院の諸神佛並びに祀靈室の三靈尊者などを祀つてゐる。

五、道院の宗旨は何か。

其の宗旨は己を渡うことによつて人をも度うことにある。己を度うには修坐誦經を以て主となし、己が身をかえりみて守り、塵障を清めのぞいて、心性を圓明にせしめ、以て無疆の樂土に達しめるのである。人を度うには災劫の彌化を以て用となす。これが有形なものは博愛を以て諸衆に及ぼし、災劫を救つて貧困を濟けるものである。無形なるものは民を悉く同胞とみなし、また凡ゆるものは仲間の如くに扱つて宣揚と度化に務め、世人の心を安らぎの中に憩わしめて、一般民衆をあまねく渡うのである。

六、道院と紅卍字會はどんな關係があるか。

道院と紅卍字會は一體兩面の機構であつて、道院は専ら道德を修めて體となして居るが、紅卍字會は専ら慈善を取り行つて用となしてゐる。而して道を以て慈を宏め、内外兼修して最善に至らしめるものである。

七、道院はどうして五大宗教を融合し得るのか。

五大教なるものは皆べてその源を先天の大道に發しており、その宗旨はいづれも世を濟け、人を渡うことにある、それぞれが教別を立てている所以は、時と地の相違、各種の異つた因素によつて、それぞれの方式が違うのである。その實は各教の最高宗旨と云へば先天の大道を以て本としないものはない。それ故に道院はいかなる宗教をも排斥しないどころか、返つていずれの教派とも融合することが出来るのである。

八、道院の中にはどんな規則があるのでせうか。

大道はもとより自然なものである。しかしその自然の中にはまた法則と云ふものがある、況んや院會とは世界性を帯びた組織であるがゆえに當然嚴格なる「綱則系統」を以て根據としてゐる。その詳しいことは「道慈綱要」に載つており、その悉くは神の御判示にもとづいており、すべてが理に順じて章となり、世界各地に推行されてゐる、なほ規律の中には圓融を失することもなく、その圓融の中に一系亂れぬ條理があるので、それは非常に巧妙な作用をなす事は言ふ迄もない。道院へ求修するにはどんな條件が必要であるか。

大道は宇宙に存在するあらゆる萬物をあまねき、うるほし育てるものである。凡そ誠心を以て道に向ふ人人に對しては種族を論ぜず教派を分たず、そして誰もが其の規章に従つて、道院で求修が出来る。修道は専ら坐を以て主となし、慈を以て用となすものである。また日頃の起居生活のあらゆる領域に於いてもそのすべてが自然のなすがままに任せられるのである。その修養の廣大なことは言葉で喩えようもないほどである。

十、道院内の人達は如何に呼稱すれば宜しいか。

道院内の人達は皆んな同修である、そして上は五教の教主から下は初進修者に至るまで求修を許可された者は悉く、老祖様の門下弟子である故、修道上に於て一律平等であり、また東西南北を分たず、老幼男女を問わず、悉く一視同仁である。其職掌に依て職名が異り、職務上其職名を呼ばず、道士ではなく、道友とも呼ばない。

十一、道院の中にはどんな經典があるか。

「太乙北極真經」及び「午集正經」が主なもので、各聖神仙佛の訓文論集や五教の各典籍などは、すべて悟りの參考資料に用いられる。

三 この二部の經典の主要の内容は何か。

「太乙北極真經」は、世をむなしくして居た不傳の先天造化の理と心身性命の源を宣べられたものであり、「午集正經」は樞府（老祖の君臨され給う天界）の秘籍である、現在はこの一部のみが傳わつており、真經の奥意を詳細に深くあらわし、更にその幽微なる妙理を明らかにしたものである。

三 道院の祭祀に用いる容器の説明。

(一) 幕：幕は神龕の前にかかげてあり、平素はこれを閉ざしておるが、禮拜の際には左右に分けて開く、尋常の禮拜のことを「叩幕」と言ふのはこの意味である。

(二) 酒：中國では古禮の祭祀にすべて酒が用ひられる。「朝に夕に日に祀るものは惟酒のみ」と經書に謂われるが、この意味は酒は常に供える祭祀品である。道院で白（無色の）酒を常に供えるのは、崇高なる敬意を表すものである。

(三) 水：水は天地萬有の母である。先天から言へば、一滴の水泡が即ち水の本源である。後天から言ふと、人は水から生れたもので、水がなければ養うこと

が出来ない、草木でさえ初芽を吹き出す時は、先づ水を含むものである。佛教は水を四大の一つ（地、水、火、風）と言っており、儒家は水を五行の一つと呼稱してゐる、水を供えることは、源を忘れないといふ意味である。

四穀：穀は人生養命の上で最も大事なものである。

眞經に「至人（神聖人）が水を生んでも、穀非ざれば活きられず」とある。穀は生の字として使われる。詩經に「生（穀）は異室にありとも死なば則ち同穴に葬むる」とある。又國策上に於いて「饑寒に飢える百姓（人民）を求めて穀を與へる」、穀を供え物にするのは生養の意味を持つのである。

田米：米は稻の果實である。南北の各地に生産される。禮記に「天がもしこれを生れずんば、地はこれを養わず、君子と謂えども禮を爲すを以てせざれば。鬼神もこれを饗せざる（受けぬ）也」とありますから米を用いて供え物にしているのは禮節にかなつて居るのである。

酒、水、穀、米は毎日これを取換えなければならぬ、二日間も續けて供

えるのは不敬である。

(六) 果：果とは植物が實つた果物である。果物には必ず核を有しており核の中には仁を藏している。仁とは生の機であり、桃、李、杏、橘などが樹上で實つた果物はすべて供え物にすることが出来る。苧薺、甘蔗などの類は供え物にするのは良くない、これ等は泥土の中で生長されたもので、「水土の品は麩味（汚水た味）のものは敢えて用いない」と言われているからである。

(七) 海燈：燈とは油を點して光を得る意味である。海燈と稱しているのは、注ぎ込まれた油が海の如くに多量であるといふ譬へである。道院の海燈が神前に置いてゐるのは四方を明るく、照り輝く景象を表示したのである。

(八) 五供：五供とはお供への時に用いる五種の容器を指す、五と言ふ數字は天地の數である。神卓の中間に三脚兩耳の鼎爐を据え置き、禮拜の際、香を焚くのは誠心が天地に通ずることを表明し、いわゆる天地をこの一爐に治かして融合せしむる意味である。また左右に蠟燭台を二つ置く。その構造は金屬で蠟燭の恰好に形造られ、容器の中に植物油を注ぎ込んでおりその眞中に棉の蕊を挿し込み、これ燃して明るくするのである。これには決して油

で造られた蠟燭を用いてはならない。金屬製の蠟燭は質が固く中が虚空になつていたので、常に明るさをもたらす功用があり、これが左右に各一つ置いてゐるのは日月長明を象徴するものである。更に左右には花瓶を二つ置いてゐるのはもとより花は華やかさがあつて、その清浄なる生たしい香りを得るがためである。以上の五供は恭敬且つ莊嚴を保つ必要がある。

(九)香爐：香爐とは瓣香を焚く爐のことを指す。香は神に人間の信心を通わせることが出来る。それ故に香は信心の使者とも言つてゐる。古人が「心香一瓣」と言われてゐるのは心から神に敬虔（誠意を以て歸衣すること）を表明する意味であり、あたかも蒸香（やいたかほり）を以て神佛に供えるが如くである。香は檀木を割つて瓣香にしたもので、その長さは約一寸位にしてから盃の中に盛つて、香爐の左側に置き、更に別の盃を用いて檀木を盛り、香爐の右側に置く。

(十)元表爐：これは「燎爐」とも言われる、表とは清心のあることを表明する。黄色の紙を折り疊み、幅は約三寸、長さ約六寸の表（紙束）で、清表とも言ふ。元とは焚くことであつて「表を焚いて將に敬わんとする」と言われて

ゐるのはその誠意を神に傳へることの意である。

(出)拜墊：拜墊とは拜跪の際に用いる用具である。その造り方は前の方が高く、後の方がやや低くで僅何寸かの差を生じ、木材で造られ方形をなしてゐる、表面を青い布で覆ひ、内部に棉をつめた柔らかいクッションに似たもので、これを御神前で最も近い場所に置き、上香や進表叩幕の際に用いる、若し主叩者に隨行者が參拜する時は、別に座ブトンに類似した拜墊をその後方に並び、一人に一個つつ與へる、若し六名以上が禮拜する時は、拜墊の左右に二つ並べ後方に三つ並べる。六名以上の場合はその人數に依つて増し、すべてが整然として並ぶべきである。

古 典禮儀式：

典禮を舉行する時は、必ず潔齊、莊嚴、誠意、敬虔なる態度を以て臨み、表情や動作にも威嚴がなければならぬ。現在各院で行なわれている儀式は或ひは修得の相異に依るのか、或ひはその受け容れ方が想わしくない爲、各々がその趣を異にするが故、外觀の見掛を妨げており、その莊重を失つて居る。そこで此處に於きまして例を擧げて説明し、皆が一様になつて、誠敬を表することを望みます。

(一)正立：儀式を舉行するにあたり（ここでは典禮の舉行と尋常の叩幕を含む）參

拜者は必らず前もつて手、顔、口を淨め、清潔を保たなければならぬ。大殿に入る時は正しい姿勢でゆつくりと歩を進め、聲を立てず、氣を靜め、又立ちながら手をうしろに組んだりしてはならない。神前でお詣りする時は身を正し、兩手を身體の側におろし兩足を揃え、拜墊の近くに立つ。正立してゐる時はわきみをしてはならない。殊に大禮服を着て大典に臨む時は特に擧止儀容に莊重さを欠かしてはならない。歩き方もゆつたりとごそかに、兩手のひらを上に向け、胸のみぞおちのところに捧げるようにし、くつ付ける。手の水袖（一枚の布の様な、手より長い袖）をそのまま折返して伏せているが、この時は決して下の方に重れ下げてはならない。手を下に重らす時は、禮服を着用しない時に限られてゐる。

(二)揖：揖とは左手を右手の上に組み、胸の前で組んだ兩手を上下させて敬意を表わす動作である。この姿勢は、兩肘をまげて左手を右手の上に、拳の形のように組み合せて（男子は左手で右手を包んだ陽の象徴、女子は右手を左手を包んだ陰の象徴を爲す）、これを胸のみぞおちのところ迄揚げてから

徐ゆるに下くだして、一心の誠も表はすものである。下を向いて禮拜してゐる時は必ず前後の衣服を整へること、一揖を終えて上半身を正し、それから兩手を元の通り、胸の前に戻しつつ、ゆつくり兩手を垂たれ下くだす。

(三)叩首：叩首は「稽首」とも言ふ、頭を地上にとどく様にして拜む動作を叩と言ふ。これは一種の最高敬意を表現する禮拜である。叩の動作は膝を曲げて跪き、兩足のかかとを揃そろわせ、腰を曲け伏して、兩手を拜墊につけて平伏し、頭を拜墊に接近して拜めばよい、しかし單ひとに頭のみを點々と下げたり又は手を動かしてこれに替へたりしてはならない。跪すく動作は人間の傲慢な心を沈めるもので、昔はこれを五體投地と言ふ。つまり四肢に一首を加えて、これを五體と爲すのである。此の様な禮を「頂禮」と言つてゐるが、最初の一叩は敬意の發端であつて、一叩の際に上半身を平らかにし、再叩をなす前、必ず上半身を起して直立し、御神位を正視する、叩幕を終れば起立して退りぞくのである。

四焼香：焼香する時には、右手で香を取り、左手をそえ兩手を眉の高さにあげ、頭はややうつむきかげんにして香爐に置き。更に恭しく、もう一度焼香す

るが決して荒々しく取り爐の中にはうり込む様でいけない。これは不敬に當るばかりでなく、神様もこの饗を受け入れず、且誠の敬意を失するものである。

(四)進表：神卓の上に束ねてある黄い表を一枚、手に取り、これを海燈の火で燃やし、兩手で恭しく頭上にさしあげてから拜墊のそばにある燎爐の中に投ずる。

(六)叩首の禮：焼香と進表が終つてから、引續き叩首の禮を行う、これは第三節に於いて説明した通りである。叩首の回数は其の時の儀式規定に従つて決める。叩が終れば、起立し一擯を行ない退出する。

(七)獻供：(これは水、穀、米、酒及び果物を供えること)獻供の時は左側に立つている修方が兩手で供物を主獻の掌監に渡し、主獻者は兩手でこれを受け、焼香と同じ禮式を以て恭しく頭上に捧げてから、右側に立つてある供獻者に渡す、この順序に従つて、神卓の上に並べ置く、獻供が終えてから、主獻者は起立する。

(八)起立：復位；起立した後は、やはり正しく立つておる。典禮或は常儀禮が終つ

てからゆつくりと拜墊から數歩後へ退る、そこから上半身をななめにして傍に退る、即ち論語の郷黨篇で言われてゐる「恰も循者の如く、足を踏踏（たふ）へ歩巾を狭く」とこまたに歩むのである。戶外に出たら、やや早く歩き、元の拜位にもどる、尋常の禮拜で退出する時も全く同様である。

(九)待壇：待壇の際は、神佛が降臨されるので、靜肅に共處で待つ、諸修は清らかな心で神の來臨に接せねばならない。恰も耳もとで親しく御教へを承るが如く、心を平穩に、氣を鎮靜して壇の側に立ち靜かに神の宣示を聽いて、これを體得するのである。決して輕はずみの振舞で、神氣を渙散してならず、又ひそひそとささやいて清靈を擾亂しない様に修者は特にこの點を注意すべきである（待壇の規則は別にある）

(十)叩幕：凡そ修人が道院で叩幕をする時は、須くその順序に従つて拜むものである、先づ正位へ、おもむろに進み、氣を靜めて拜墊の前に正立し、一揖、一拜、一六上香、一進表、然るのち九叩（九回禮）を終えて起立し、一揖して引きさがる。（以上は先に述べた儀式通りに行ふ）、正位で叩幕を終え、次は引續き統院へ、五叩禮を行ふ。

先づ正立し一揖一拜跪一叩一五上香一進表一五叩一起立一揖して引きさがり、次は更に坐院へ壇院一經院一慈院一宣院と言ふ順序に叩拜して行くのであるが、各院に於ける禮拜方式は、すべて統院と同様である。最後に祀靈室で三上香、進表、三叩首の禮を行つてから公位の前で三燒香、三禮をして退出する。

以上を以て叩幕の禮拜を終了する。女社方面に於いては正位での叩幕は全く道院と同様である。遺台聖（觀音様）及び十菩薩の聖位は五叩禮を行ふ。祀靈室では三上香、進表、三叩首であり、又公位ではやはり三上香、三禮をなすのである。

去 經及び賣の拜領

經とは「太乙北極眞經」のことで賣とは修賣のことである。これらは修人の誰もが拜領せねばなぬもので、舊曆の毎月一日或は十五日、眞經拜領の儀式に遵つて統掌が執事の各位を従えて、此の儀式にのそみ、拜領者に經賣を授けるのである。經賣拜領後、如何にして眞經を保存し、如何にして修賣を佩帶するかについては次の「領經須知」と「佩賣原訓」を参照すればよい。

附：「領經須知」及び修責佩帶原則

一太乙北極眞經は眞經の副集であつて、庚申（庚申）の冬（冬）（民國九年）に傳授されたものである。

一太乙正經午集は眞經午集であつて、癸亥（癸亥）の夏（夏）（民國十二年）に傳授されたものである。

一修方が眞經副集を拜領して滿三ヶ月後に、若し眞經午集の傳授を希望する者は、必ず眞經副集を拜領した道院に申請し、統掌院監の呈判文（呈判文）に、經の代金を添附して母院に送り、許可を受けてから、定められた期日にこれを拜領する。

一經典を拜領した後は必ず淨室（淨室）に供奉し、これを汚瀆（汚瀆）（よごれけがす）してはならない。（若し淨室がない時は神棚（神棚）などに供奉しても良いが、決してこれを他人には勝手に開いて見たりしてはならず、鄭重に取扱ふべきである）。

一經典の案前には香燈、白米、粟、水を一皿つつ供える、米と水は毎日これを新しく取換えねばならぬ。水や米の取換え不便があても、香燈だけは決して決して缺してはならない。

一經典の前での儀禮は次記の通りである。一揖、一拜跪、一叩、六燒香、進表、九

叩、起立、それから一揖してひき下がる。毎月一日と十五日には家族の全體も均しくこの儀禮で參拜する。

一眞經の妙諦は參悟を重んじ、符籙（わりふや秘文）のようなものではなく、僅かにこれを供奉するのみである。誦經の際は眞經副集の未集第一節「亦誤於強悟」へまた強いて悟るに誤ちありに續く箇所、及び、正經午集第二十四節第十四錄「而爲輪界造乎終始者也」へ而して輪界の爲に、終始に造らしむる者也に續く箇所は、恭敬の意を表わすため、これを避けて宣讀せず、而して眉箋の註釋に遵じた儀式の禮を行うのである。各修方が家で經典をよむ時には、聲を立てずに默誦するのである。

一災難に遭遇した時には經典の前で虔誠に叩して祈り、且つ聖號（至聖先天老祖）を百回となえる、疾病の有る時は、お供への水を煎いて飲むこと。

一修方が皈道（逝去）した時には眞經を焚化し、更に燃した灰を袋に容れて胸の上にかけてやる、入棺に間に合わない時は棺蓋の上に置いて共に埋葬する。但し御判示に依り、經典を後繼者に残す場合、その後繼者はこれを虔誠に供奉せねばならない。

(壬戌民國十一年)三月五日

先祖の訓に、修方が皈道した時は男女をとわず統掌を招き聖號六十遍を、その修方の家族と共に誦する。統掌は立つて誦し、家族は跪いて、顔を北の方に向けて誦するが家族は悲哀を示してはならない。默誦の際、皈道者は既に上乘に達し得たのであると、心と目でそう見てやれば、靈魂が升天するものである。生前に各寶を授けられた者は、これを佩帶させ、證件はこれを燃して灰色の絹袋に納め、同じくこれを上衣の二番目のボタンに掛けてやる。

一職修方が道院より傳へられた經典を拜領している場合は以上の各規定にもとづいて處理すること。(辛未「民國二十年」正月二十二日

孚聖訓：(各經を定則の中に併列(編綴)してある)。これは各地修人の注意を充分にうながす一法である。

一修寶佩帶原則(摘錄寶則各條)

九目：各寶をシャツの襟前にかける、但し金質各寶及び慈寶は道院の慶典日に、これを外に佩帶する。

十目：各寶は旅行、病氣、待壇(禮拜)、習坐(靜坐)等の際に必ず佩帶する

こと。

十一目：各寶を汚したり、遺失した時は、省過室に於いて三庚（三十日）の坐をなし、且つ十倍の代價で購入する。餘分の金額は寄付金とし慈善事業に寄贈する。

夫 神位の説明

(一) 正位：道院には莊嚴なる神龕が設けられておる、内部を上下二層に分け、上段に老祖の聖像を、（この聖像は濟南千佛山の空中で顯像遊ばされた時に撮つたものである）、下段には老祖と五教教主の神位（書いて有るのは、青玄宮一玄眞宗三元始紀至聖先天老祖と道、佛、儒、回、耶五教教主の神位）を安置しておる。龕前には長方型の神桌及び元寶式の横桌（兩側が斜めにはねあがつてゐるサイトテーブル）を各一個つつ置かれてあり、前面は木製のテーブル掛になつてゐる。中間には橢圓形の蒸胞があつて、その中央に紅卍字が嵌め込まれてゐる。下の方には海水江芽が彩られ見ただけでも非常に莊嚴であり且つ美觀そのものである。更にその前方には拜墊と燎燈を各一具つづ置かれてあつて、専ら叩幕の際、拜跪

や進表に用いるものである。龕イナ前の卓上には清酒六杯供え、並べ方は前に五本、後に一本で、この〇00000といふ形で、(その中の一杯は神位に向けてある)、すなわち五を合して、六にもとづくの意である(五教を統合する、萬教同源思想に基づくものである。)清酒の前面に、水と穀と米を三盃、置くが、その並べ方は〇0000式の如く(まん中の水は眞水マコを喩える意味で左邊の穀と右邊の米は、眞悉の意味を喩えるものである)。水穀を盛つた盃サカの前には、更に果物クワ五皿を此の〇00000式に並べる。(「神位」酒〇0000「水穀米〇〇〇」果物〇00000「毎月一日と十五日に常儀シヤウギ禮レイを行う時は必ず、果物を供える。亦儀式イギシキを行う時も然りである。)更に前方には大きな盃に容れた壇水が置かれてあるのは拜領用に備え置いたものである。これには定式的なものがない。海燈については既に前にて説明したので、更に述べない。正位及統院、壇院、慈院、宣院と祀靈室には皆んな清酒を供え、正位の並べ方は前述の通りであるが、各院に於ける並べ方は〇0000式で、祀靈室の方は〇000式である。坐院と經院に供えた清水を甘露とも呼ぶ。(佛教徒は酒を飲まないからである)ここでも並べ方は各

院と同様である。正龕の上の方には、神様から書き賜わった横額が、か
かげられ、これを以て展化の鄭重なる意義を顧かに示し、且つ道名の名
付用として備えてある。例へば台湾主院の如き匾額のテーマは、「信教
自由」の四字で名付方法は、上の方から、それに順じて信一教一、自一
、由一と言ふ様この四者の道名を推し出して、その餘は順序よく排列し
て行く。

(二) 統院

則文は「道蘊先天、無名無迹、道生萬物、有物有則。爰創道院、肇始東
邦、合五統六、宇宙煌煌！體立用宏、綱舉目張。寶瀛内外、師彼津梁、
如車遵軌、如航御風、世界短燭、海臻大同」。

「道は先天をたくわえ、名なく迹なし、萬物は道より生じて物と自然の
條理あり。東邦を肇めに、ここに道院を創り、五を合して六にもとづく
、宇宙煌煌たり、天に従いこれを宏く同いて内外に天國を築き、津梁を
あらわして、車を軌道で走らすが如く、風に乗つて航行するが如くして
、世界の法則を大同に及ぼす」。

統院の神龕は正位のそれに比べてやや小さく内部は上下二段に分れてお

り、下段の中央に統院掌籍孚聖（即ち呂祖）と附掌籍昌佐神（即ち諸葛武侯）の神位を合祀し、その左右に樞府宗基真人と元基真人、都巡使楊忠愍公と宣道使和光真人、それから道院院監默真人の神位を供奉する、上段の中央には統教掌籍孔聖と附掌籍慧聖の神立を合祀し、その左右に道德社掌籍康聖や鎮壇將軍關聖を護壇將軍桓聖並びに蓮台聖の神位を供奉してゐる。龕前には神桌と横テールガ各一台を置き、案上（桌上）に清酒を五杯供える、水穀は正位と同様であり、又海燈や燭台、香爐、黄表、壇香、香粉、拜墊及燎爐などもすべて正位と同様であるが鼎爐と花瓶はない。ここの儀禮は五上香に五拜禮である。

(三) 坐院・則文は「躁、釋、矜、平、厥、功、是、坐、聲、屏、息、啄、靈、根、以、固。憧、憧、匪、靜、啣、啣、匪、默、靜、然、在、心、毋、惑、爾、魄！」

「躁」をほぐして、くるしみをやわらぐは、これ坐のいたらす功なり。聲をふせぎ、息を啄いて、靈根を固めば、憧憧として靜まらざるとも、啣啣として默すあたわざるとも、靜ただ心に在るのみ、汝の魄に惑うなかれ。」

ここの設備は、段を分けない神龕が一座あつて、供器などの設備は統院と同様である、龕内に統坐掌籍達摩佛と附掌籍普靜佛の神位を合祀して居る。供品も統院に同じく、ここでは甘露を供える。附設の坐室（省過室ともいふ）が一個所あつて、習坐に用いる。

四壇院：則文は「神人接靈、惟靜惟肅、上天聖遠、不疾而速、心香一瓣、合漠通微、妙山眞諦、大道指歸」。「神人が靈を接すには、ただ靜肅を旨とする。上天は遙るかといえども、疾からずして速かなり、一瓣のかほりに廣く心を微かに合わず、妙山のまこと深き眞理は大道のおもむきに歸するものなり」。ここで設備される神龕及び供品などは、すべて坐院と同様である。供奉されているのは統壇掌籍尙眞人と附掌籍岳聖の神位を合祀し、その傍に守壇仙鄭成功及び守沙仙吳鳳の神位を合祀してゐる。（鄭と吳の二仙は台灣主院のみがこれを祀つてゐる）本院の供物用テーブルは長方形で長さが六尺ほどあり、この上に沙盤を置いて扶出の時にこれを用いる。

因經院：則文は「一炷元充、無極之眞、元黃未判、先天之經、因文見道、炳若日

星、藏茲寶笈、錫爾羣倫！」「天地の氣のもとに、無極のまことを充實す、黒色と黄色未判の時に先天の經あり文に依つて道を知るは、日や星を見るが如くあきらかなり、この寶笈に經を藏め、汝ら衆人になん。」
一切の設備は坐院と同様である。ここでは統經掌籍文殊佛と附掌籍普賢佛の神位を合祀して居り、甘露を供える。附設の經筥は藏經用のものである。

(六) 慈院：則文は「萬物一體、博愛爲慈。藏利匪福、樹德務滋、無間人物、己溺己飢、同躋仁宇、皞皞熙熙」。「萬物は一體にして博愛を以て慈となし、利をたくわえるは福にあらず、徳行を積み、人と己に間を置かず、他人に得られない者があれば、皆自分の責任として慈しみを施せば心が廣く、寛やかで樂しきものなり」。

一切の設備は經院と同様である。ここでは統慈掌籍濟佛と附掌籍孫真人の神位を合祀して居り、清酒を供える。

(七) 宣院：則文は「圓靈一點、孕育大千、茫茫世宙、渺渺眞源、微斯警鐸、孰與導誠、奇象鞮譚、駟哉虔宣！」。「一つの圓靈(天)は大千世界を孕み、茫

々たる宇宙の渺々たる眞源が、かすかな警となり世界を導く、疑いを問うものに通譯して前に導き、ここに誠を以て宣化に務む。一切の設備は前院と同様である。ここでは統宣掌籍亞聖孟子と附掌籍施洗、ヨハネを合祀してゐる。傍に仁基眞人兼誠明普化天尊の神位を祀つてゐる。へ前列の各聖神仙佛の傳記は、台灣主院では道慈綱要にもとづいて、聖哲史略專刊を印刷してある。

(六) 祀靈室：ここには統靈尊者、渡靈尊者、護靈尊者の三靈尊者の神位を祀つておる。一切の設備は前院と同じである。酒三杯を供えて三上香、三叩首の禮を行うのである。諸先靈の靈位は正籍と左儀と右儀に分け、又傍に公位を設けて、職方の靈位を祀つてゐる、ここでは三上香、三禮を行うのである。

七 院會の職務

院會の服務人員の組織構成については「道院綱院則及び事務細則」の中に詳載されて居る、又老祖さまも「新判道院規程」を更にお示しになつておられ、あきらかに詳しく知る事が出来る、したがつて凡ゆる國家、地域に於いても全く問題が

ないものである。その原因は綱則の明確なる規定を除いた外、大部分の主要責任者は殆んど神事より直接派遣されたのである、假りに人事的行爲に依る推擧があつたとしても、これ亦呈判して神事の許可を受けた後、始めて任命されるものである。茲に於て主要要職を左記に列擧する。

(一) 統掌：全院の内外事務の管理を行ひ、これを大成せしめる責任者。

(二) 院監：内部に於ける一切の道務や慈務を監督する責任者であり、又統掌に變つて旨意を發したりする。全院の筭論（カギ）である。

(三) 統文：全院の文書事務の責任者。

(四) 統藏：全院の財務管理者。

(五) 統筭：全院の總務管理者。

六 求修：

道院への加入を求めることを求修という。老若男女の制限なく、だれもが求修する事が出来る。求修の手續きは鄭重を期する爲め、必ず本院の掌監及び同修六人の紹介により、先づ登記してから院監の審査を経て、それに合格してから農曆の一日或十五日通知により來院の上、求修の禮を行ふ先づ願文と疏文を書き、然る

後に宣掌の指導により、宣院の前に跪ついで願文を恭讀する。この行禮が終れば、院監の指導に依り、統院で求修許可の願文を恭讀し、次に統掌の指導により、正位の前で謝恩の禮を行ふ。禮が終つてから、再び坐院に移り、坐掌の指導で指坐禮行ひ、これを終えてから習坐室に入り坐掌から指坐を受けるのである。

乙、慈務「即ち紅卍字會の事務について

一、世界紅卍字會の意義

命名の意義：世界の二字は全地球に普及して居ると言ふ具體性の意味を含み、人々は自他の差別なく、又國境や區域の區別がないと言ふ意味である。紅卍字會の紅の色は、赤子の如き心を取つたものであり且つ光華燦爛の意を象徴してゐる。卍字の意義は道在中樞に取つて徳を外にめぐらし、四維（禮義廉恥）を上下に普遍させて、十方に順じて従ひ、あまねく流れてたたずむことがない、これが天下大同の目標を形成する所以である。會とは共同の意志を集め、これをまどめ合せて經營した慈善事業を外部へ公開した一種の表示である、これが本會命名の由來である。

二、宗旨：人類の福祉を増進させ、世界大同を促進して災難の救済に従事するを以て宗旨となす。

三、紅卍字會は如何にして發起したか。

紅卍字會は道院で發起したものである。道院は修道坐誦を主としてゐるゆえ、ここでは個人の道徳學養を以て心となしており、而し乍ら人類の天性は素よりその本質が善良であるため、修養を行つてゐる中に、若し心性が圓明の境に達し得れば、必ず凡ゆる人民は我が同胞であり、物はすべて我が仲間である如く親しんでこれ抱擁し、人類の難苦や世界の災難に對して、當然誠を以て、恰かも天が人を憫れむが如き慈悲をもたらすのである、紅卍字會が發起された所以は災難の救済を以て用となすのである。

四、紅卍字會の成立時期

紅卍字會は中華民國十一年（西曆一九二二年）に成立し且内政部にも報告して認可を受けておる。

五、紅卍字會はどのような仕事をしているのか。

紅卍字會が成立してから、その後一日として災害の救済活動を停止したことがな

く、國內においては、幾度の戦争が如く、平素無役の場合には臨時の救済組織は無いが、而し各省に水害、旱魃の災害が発生した時には、總會と分會が力を合せて臨時救済を行ひその善處に當る。國際上に於ける活動としては、日本が關東大震災の際、即ち一九二三年及び一九二七年二回にわたつて救済を行い。一九二七年南京の役には當時南京に在住していた英、米、フランス、ノルエー、日本などの各國民二百余名を救護してゐる。一九二九年の中、ソ衝突の際は邊境救済隊を派遣しておる。これらは皆んな臨時慈務の範圍に屬し、永久慈務として病院、學校、貧民工場、孤兒院、身障者施設、養老院、惜字會、因利局などがある。これらはいずれもその使命を十分に完うしてゐる。その他にも平常の施棺（ひづき）を無料と與える）や施醫、夏季に於ける御茶の供給、日射病施藥、又冬季に於ける粥の供給所、衣類や食糧の給與などの救済工作があり枚擧することが出来ない程ある。これが爲めに各界並び各方面より讚美や贊助を獲得して居る。

以上のここで説明しましたことは、すべて事實がこれを證明しております。

六 紅卍字會と赤十字社との區別。

赤十字社の起源は戦争による傷亡者の救護をする爲に成立したもので、各國の赤

十字組織の大半は軍事關係の組織範圍に屬しており、従つて彼等の仕事は戰爭救濟が中心となつてゐる。紅卍字會は平和や戰時の如何を問はず、すべての天災人禍の救濟及び緊急措置を任務としており、その目的は世界平和と人類の幸福の實現にある。全世界のあらゆる生命ある存在のために一大善縁を結ぶこと、これが紅卍字會會員の職責であり願いである。

台北主院

中華民國六十九年一月

西曆一九八三年九月一日

「道院及び紅卍字會の概要」

台灣主院

印贈

中華民國台北市復興南路一段³¹³巷一號

電話：七〇三五八九二 七〇六三一六一

印刷所 佛教印經館

台北市武成街63巷27號

電話：三〇三—七四四二

